

東京地検特捜部

山本祐司

なぜ逮捕に踏み切れたのか

とうきよう ち けん とく そう よ
東京地検特捜部

やまもと ゆう じ
山本祐司



角川文庫 6196

昭和六十年十一月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—
電話

営業部(〇三)二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

東京地検特捜部

山本祐司



角川文庫 6196

目次

第一章	檢察の千両役者	五
第二章	近代檢察の神さま	四一
第三章	帝国海軍の犯罪	六六
第四章	派閥抗争の幕開け	八八
第五章	經濟檢察の復権	一二四
第六章	政治と檢察の戦い	一五一
第七章	指揮権発動	一八〇
第八章	歴然たる勝敗	二〇四

第九章 特捜部の黄金時代

三九

第十章 革新議員の登場

二五三

第十一章 構造汚職の完成

二八三

第十二章 総理大臣の犯罪

三三三

あとがき

三六七

解説

室伏哲郎

三八一

第一章 検察の千両役者

1

昭和五十四年五月十五日、東京地方は晴れたり曇ったり、ところによっては、一時雨も降って、はつきりしない天気にもまわれた。梅雨を思わせる低気圧が本州の南岸を通過したからである。

内閣総理大臣大平正芳は午前七時五十二分には、世田谷区瀬田^{おおひらまさよし}の私邸^{せだ}を出て国会にむかった。この日は火曜日で、午前九時から院内大臣室で定例閣議がひられるからである。定刻より十分も早く防衛庁長官山下元利^{やましたがんり}が笑顔で登院した。

「うれしそうですね」

と新聞記者の一人が声をかけたが、

「やあ、私はいつもこうなんです」

山下は、かるく受けながした。

しかし、記者たちの多くは、この山下の笑顔は、防衛庁が米国の航空機メーカー、グラマン社から購入する早期警戒機E2Cの疑惑が晴れたことと無関係でないと考えていた。その疑惑

を晴らしてみせたのは東京地検特捜部である。

法務大臣古井喜実は定刻より三分おくれた。

大臣室前の記者団に、「きょうで終わりですねえ」といわれ、「いやまあ」とことばをにごし、ちょっと立ちどまって、

「きょう午後、検察のほうで、発表があるんだろ。総理には、そのことを報告します」とだけいった。

「岸さん、松野さん、そのほかの政治家の名前もはいつていますか」記者たちが聞いた。古井は、「具体的なことはいえないね」といい捨てて大臣室に消えた。

その光景だけみれば、毎週「火」「金」曜にひらかれる定例閣議の朝と変わりはない。しかし、この日は少しばかりちがっていた。

古武士のような険しい顔の男が、古井法相到着の少し前、院内大臣室隣の控え室にはいったのである。記者団の質問にも唇を固くむすび、無言で押しとおした。

この日、東京地検特捜部は、五か月におよんだ航空機疑惑、「日商岩井事件」の捜査を終結しようとしていた。定例閣議は三十分あまりで終わり、散っていく大臣たちと入れ替わりに、控え室にいた険しい顔の男が、首相執務室にはいった。

法務省刑事局長伊藤栄樹といった。転勤の多い法務・検察のなかで、この二十年間、東京をはなれたことがない。昭和二十四年任官組ではトップを走っているばかりか、法務省の刑事畑だけではなく総務、会計、人事課長という中枢ポストを歴任し、いまや法務・検察全体のエリ

ートと目^もされている。切れ者で、度胸がよく、上司に対してもいいことはズケズケというような男である。この赤じゅうたんの席では唯一の法務・検察の代表なのであった。

首相執務室で、伊藤は、古井とならび、大平や官房長官の田中^{たなか}六助^{ろくすけ}と相対するかたちで、「政治家逮捕」不発に終わった東京地検の捜査結果を報告した。

大平は、報告を聞きおわって、

「検察も精いっぱいやったのだから、もうこれ以上のことはできなからう」と感想をのべた。

「まあ、これで世論が納得するかどうかは別問題だがね」

と古井がつけ加えた。執務室を出た大平は上機嫌であった。古井も田中もなぜか晴れ晴れとした顔をしていた。

伊藤だけは近寄りがたいほどきびしい表情をしていた。新聞社のカメラマンが大平にレンズをむけると、大平は、「伊藤さん」と周囲を見まわし、

「立て役者がいないといかんじゃないか。きみは千両役者なんだから」と後ろのほうにいた伊藤をひっぱり出した。

「これでやっとそろった」

と大平はうれしそうだった。カメラのフラッシュが光り、伊藤が、古井について退出しようとするとき、大平は、また、

「伊藤さん、伊藤さん」

と呼びとめた。そして、

「長いあいだ、ご苦労さんだった」

といって、伊藤の手を固くにぎった。それは政府と法務・検察が手をにぎっているような印象をあたえたが、伊藤の顔は笑っていなかった。大平が、この伊藤から、直接うけた報告は、東京地検特捜部が、総力をあげた航空機疑惑の「日商岩井事件」が、ついに政界にのびず不発に終わった、というものだった。起訴された者は、副社長海部八郎（五五）、機械第三本部長兼東京航空機部長山岡昭一（五一）、航空機部長補佐今村雄二郎（四九）、それに十年もまえに日商岩井をやめている元航空部課長代理有森国雄（四六）と日商岩井関係者ばかりである。それも外国からの送金方法がわるかったという外為法違反、国会で真実をいわなかったり、証言を拒否したという議院証言法違反という疑惑の外側の起訴ばかりである。

ボーイング、グラマン、マクダネル・ダグラスという米国の三大航空会社が、航空機の対日売り込みのため日米の政・財・官界を動かして展開した壮大な疑惑のスケールからみれば、ため息が出るようにちっぽけな結末である。

政界でひき出されたのが、日商岩井から五億円をもらったという元防衛庁長官松野頼三（六二）たった一人——それも八年から十二年もまえのことで、とくに時効、裁判にもかかけられないというのでは検察の意気があがらないのも当然である。

東京地検特捜部の長い伝統からみれば、大企業の枢要部にメスを入れ、政界にまで捜査をすすめながら、一人の政治家も起訴に持ちこめなかったことは、屈辱以外の何ものでもないから

だ。

その法務・検察の代表である伊藤のまえて、「不発の捜査」を喜び、はしゃいでいるようにさえみえる宰相大平の姿に、自民党長期単独政権のおごとと、その崩壊の兆しがあらわれはじめていることに、ひのき舞台の主役たちは気づかない。

では、喜色満面の大平ら政権要人たちのかたわらで一人、苦虫をかみつぶしたように侍立していた伊藤は、大平のいうように「千両役者」ではなかったのか。

いや、この航空機疑惑のドラマ全体を通じて、確実に「千両役者」であった。

「日商岩井事件」は、戦後疑獄史のなかでも奇妙な事件であった。外国からの航空機導入という国家政策がからむ疑惑は、古くからある。とくに昭和三十年代のロッキード、グラマン問題以来、ときに謀略的様相をみせながら現代まで尾をひいている。

そのなかでもこんどの日商岩井事件の疑獄ドラマは、米国で開発された最新鋭機を軸にして展開した。グラマン社のE2Cホークアイという早期警戒機である。胴体の上に、皿のような電子装置を満載し、日本列島を三編隊（九機）で哨戒すれば、いっさいの死角がなくなり、日本に接近するあらゆる不審機をキャッチできる優れた性能をもっている。日本の国防政策の根幹となるはずの新鋭機だったのだ。

日商岩井事件の捜査は、疑惑の暗雲が立ちこめている航空機商戦のなかで、このE2Cホークアイについては「疑惑晴らし」のために政府の要請で発動された性格を秘めている。

昭和五十三年も暮れようとしたとき、米国の証券取引委員会（SEC）が一つの報告書をワシントン連邦地裁に提出した。SECはロッキード事件解明にあざやかな切れ味をみせた機関であり、報告書の表題に「マクダネル・ダグラス社」の名前があったことが検察当局の関心をよんだ。

十二月十四日のことであつた。大平正芳が自民党総裁公選で福田赳夫（たけお）をやぶり、政権をとつてから、まだ一週間もたつていなかった。

「8Kレポート」とよばれるこの報告書にこんなくだりがあつた。

「一九七〇年に日本への民間機売り込みのため販売促進費として一万五千ドル（当時のレートで四百五十万円）を日本でのコンサルタントにわたした。その後、さらに十萬ドル（三千万円）を手数料としてわたした。この一万五千ドルの一部あるいは大部分が、日本政府高官にわたつたかもしれない」

だが、政府が衝撃をうけたのは、このレポートではなかった。さらに年がおしつまり、あと数日で新年が明けるとき、法務省に、米国から極秘の情報がよせられた。もう一つのSEC情報——グラマン社の不正支払いに関するもので、そのなかに「E2Cホークアイ」は登場した。

〈8Kレポート・その2〉

「一九六九年、グラマン・インタナショナル社はE2Cの日本政府への売り込み努力に関し、一人の日本政府高官の助言によって、日本における販売代理店を変更した。この代理店は、日

本のコンサルタントである米国人に手数料を支払ったことがあること、また、そのコンサルタントは、その手数料の一部を、一人または、それ以上の日本政府高官に支払う可能性があったことをグラマン・インタナショナル社は一九七五年になって知った」

この「E2C」に政府は衝撃をうけた。

「一九六九年の代理店変更」とはE2C売り込みに関するグラマン社の日本での販売代理店が、突如、住友商事から、日商岩井に変わったことを指している。そこに何かがかくされているはずであった。そしてこの極秘情報飛びこんできたとき、政府はすでに九機導入計画の第一次契約分五百六十六億三千八百万円を五十四年（一九七九年）度予算に盛りこみ、いわば総仕上げの時期にあったのである。

かりにこのE2C購入決定の過程に、ロッキード事件の田中角栄たなかかくえいのような政府高官の暗躍があったとすれば、国防政策を金でねじまげたものとして、導入を断念せざるをえないような重大な事態に政府は追いこまれる。

この極秘情報は、ただちに、伊藤栄樹刑事局長―安原美穂やすはらよしほ事務次官を通じて、古井喜実法相に通報されるべき種類のものではあった。

「疑獄に発展しやせんか。政治家がつかまるようなことになりはしないか」

古井の疑問はもつともであった。年が明け、このSEC報告書の内容が公表されれば、おそらく「第二のロッキード事件」として世論はわき、東京地検特捜部の再度の出勤となることはだれがみても明らかだったからだ。

法相就任のとき、「ロッキード事件の糾明は当然だ。圧力を加えることはすべきでない。かりに大平首相が何かいってきても、私が聞くやつでないことくらいは、彼自身がよく承知だ」と、おうように語ってみせた顔とは、まったく異質な現実政治家のもう一つの顔が古井にもある。

昭和五十三年という年の終わりに、赤レンガの法務省で、E2C疑惑の成り行きを案ずる古井に、伊藤や安原がなんと説明したか、定かではない。不確定要素を多分にはらみながらも、やがて明ける新年の政局全体にかかわる重大事であり、その判断自体、極秘にされるべきものである。

しかし、古井が耳をかたむけたと思われる「予言」は、ロッキード事件のように捜査が燎原（りやうげん）の火のように燃えひろがり、やがては超大物政治家を獄に投ずるといような積極的なものになかったことだけは確かである。

捜査見通しの暗いものであったにちがいない。

E2Cホークアイの疑惑は、「現在進行形」である。まだ政府の予算作成段階である。かりにグラマン社から日商岩井を通じて大物政治家に働きかけがあったとしても、金の受け渡しは、ロッキード事件の田中角栄がそうであったように、導入実現の後になるはずで、まだ、この時期には金の授受がおこなわれていない可能性がきわめてつよい。

たしかに、E2Cの対日売り込みは四十七年九月、田中首相・ニクソン大統領による日米首脳会談のさい、グラマン社にたのまれたマーシャル・グリーン國務次官補が日本側に購入要請

をするなど、売り込みは熾烈であつた。そして、採用決定は五十一年九月六日、ソ連亡命將校のミグ25が「低空から」いとも簡単に日本の防空網を突破し、函館空港に強行着陸したショックが契機になっている。政治家暗躍の余地はある。しかし東京地検が田中らを逮捕したロッキード事件から二年余しかたつておらず、政治家たちが汚職摘発を警戒し、汚れた金に手を出しにくい抑止効果が効いていたことも十分考えられる。

若いころ、特捜の鬼といわれた河井信太郎検事のもとで造船疑獄捜査にたずさわり、三年前までは東京地検次席検事として捜査を指揮していた伊藤が、これらの点に気づかないはずがない。しかも決断すれば大胆な檢察官である。「政界にはおよびますまい」ということばが出て不思議ではない。

古井は安堵したにちがいない。そしてこのことは、ただちに宰相・大平へ報告されねばならない重要事項であつた。

グラマン、ダグラスなど航空機をめぐる日商岩井事件は、ロッキード事件とはまったく異なつたスタートにならざるをえなかつた。おなじアメリカからつたえられたSEC資料が発端なのだが、ロッキード事件のときのように、大事件をまえにしたときの特有の燃えるような緊迫感がまるでなかつた。

日商岩井疑惑は、E2Cという、たぐいまれな電子警戒機を軸に、最初から政治の思惑が深くかかわつた異例の幕開けになつた。

年が明けた。昭和五十四年正月、東京はおだやかな日がつづいた。一月四日、古井は法務省の新年祝賀会に出た。法務、検察の高官たちは、ほとんど顔をそろえていた。

このときの検察首脳陣というのがそのままグラマン、ダグラスの航空機疑惑へ立ちむかう捜査陣ということになる。

最高検は、神谷尚男^{かみや ひさお}検事総長、高瀬礼二^{たかせ れいじ}次長、木村喬行^{きむら たかゆき}刑事部長、東京高検が辻辰三^{つじたつ さぶろう}郎検事長、藤島昭次^{ふじしま あきら}席、野辺一郎^{のべ いちろう}刑事部長、東京地検が江幡修三^{えはた しゅうざう}検事正、大堀誠一^{おほほり せいいち}次席、吉永祐介^{よしなが ゆうすけ}特捜部長、村田恒副^{むらた ひさし}部長、石黒久暉^{いしくろ ひさあき}副部長という陣容である。

ロッキード事件のとき、検事総長布施健^{ふせ たけし}の片腕だった検察ナンバー2の神谷尚男が東京高検検事長から昇格して、総長という最高指揮官になっていた。次長の高瀬はロッキード事件のとき、東京地検検事正として第一線の捜査陣を指揮した人であり、セミの鳴く暑い日、逮捕した元首相田中角栄に「これからは環境が変わりますから、健康にはくれぐれもご注意ください」と言いふくめて小菅^{こすげ}の東京拘置所へ送りこんだことで有名だ。東京地検検事正の江幡も、ロッキードでは最高検の担当検事であり、検察首脳の半数は、ロッキード捜査をやりぬいた経験者なのである。

さらに特捜部は、ロッキード事件の捜査主任だった吉永が副部長から同期のトップを切って部長に昇格、さらに田中角栄の取り調べにあたった石黒や丸紅専務^{まるべに}大久保利春^{おおく ぼしはる}を落として、政

界捜査への突破口をひらいた村田が副部長にいて、特捜部に限って言えば、強力な布陣といえた。

古井法相の新年あいさつは、なごやかなものだった。どこか、ひょうひょうとした味のある人柄が、そのまま酔いにあらわれたようなことばつきだったが、ほんの一瞬だがカチリとした硬質的なものがあつた。

「世の中、本来は平穩なのです。それを野党とマスコミがさわがしくさせるんです」

E2C疑惑不発の計算のもとに、これからおこるであろう嵐に先手を打ったつもりなのであらう。

米国証券取引委が、グラマン社のE2C疑惑の資料を公開したのは、翌五日のことである。ワシントンの特電が各新聞社のテレックスに入り、その日の夕刊は、グラマン疑惑の大見出しがおどつた。ロッキード事件の再来を思わせるような衝撃的な紙面構成であつた。

古井のいう、「世の中、本来は平穩なのだ」がマスコミと野党が……という騒ぎがはじまつたのである。

そして、最初の奇妙なできごとが、四日後にやってくる。

一月九日朝の東京地検——定例会見に集まつた司法記者たちに、大堀誠一次席検事は「ちょっとお話ししたいことがあります」といつてから一枚の紙をとりあげた。東北大工学部航空工学科卒業というめずらしい経歴の大堀は、左右それぞれの手で同時に計算ができるという「特技」の持ち主だが、この日は、むしろ淡々とした表情であつた。午前十時を少しまわっていた。